

◆teku-teku 2010★墨東まち見世2010を歩く(活動記録+評価集計結果)◆

企画■アートは街に根付いてきたか ～墨東まち見世2010を歩く～

日時■2010年11月23日(火・祝) 11:00～18:00頃

コース■東武線曳舟駅～鳩の街通り商店街(靴郎堂本店、アート&カフェこぐま+おしょくじ、こすみ図書)
～東向島珈琲店(レトロクッキング)～旧アトレウス家～玉の井Showroom～現代美術製作所
(ネットワークパーティ)～キラキラ橋商店街(墨東文庫)～スパイスカフェ～地下鉄押上駅

参加者■◎大竹 亮、井手幸人、栗原 徹、野中るみ子、矢口晴美、山田絵美※、脇野真澄
(以上7名、敬称略、※別途参加、◎コーディネーター)

企画主旨■

墨東まち見世2010(10/2-11/23)は、以前の「向島博覧会」の発展形として、曳舟・京島・東向島・八広・押上エリアの古民家や商店、アパート、町工場などを会場に、多彩に行われているアート、リノベーション、まちづくりなどの活動群をネットワークする試みです。当日は会期最終日で、参加20プロジェクトのうち、7～8件が開催され、全体を総括するネットワークパーティが開かれます。年月を積み重ね、アートがどう町に根付き、町はどう変わってきたのか、歩いて検証しましょう。

<参加者の意見・評価>

1◆墨東の町(歩いた範囲)全体

評価:3.29 内訳:AABBBBD

A:商店街と若者が元気。生活している人や物が外に自然と出てきている。ここで生活する町だと思いました。一方で、スカイツリーや駅前の再開発など風景や人の層がガラッと変わったらどうなるのか、行方が気になります。

A:庶民的な商店街、路地や長屋の住宅地、そして町工場が混ざった人間味と懐かしさがある町。迷路のような構造も、町の深みと奥行きを感じさせる(今回ようやく町の全体構造を理解した)。改造されていくでも沈滞してしまうでもなく、持ち味を生かしながら、町のリノベーションが進めばいいのだが。

B:下町の雰囲気の色濃く残っており、迷路的な路地空間と、所々に出現するお洒落なスポットなどがとても魅力的。今は観光地化があまり進んでいないが、スカイツリー効果で街が荒れてしまうのが心配。

B:車で通過することはあっても、歩いたのは初めてである。曳舟駅を降りた時は、いったいどこへ行ったらいいのか、ちょっと歩くと自分がどこにいるのかわからなくなってしまうような町。よそ者には入りにくい空気を感じながら、アートマップを手に歩いた。観光客相手ではない、地元で根を生やした町である。

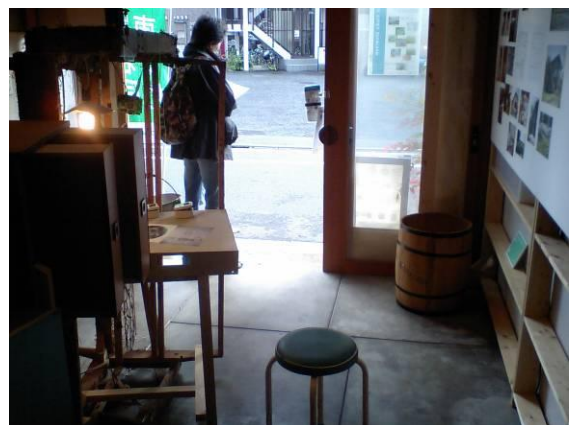
B:場所場所では頑張っているなあ～と思いました。まだ外からの力に頼っているようで、この町に住んでここからアートを発信する若いアーティストたちが増えるといいなあ～と思いました。次回歩くときは、現代美術製作所が中心基地となり、地元に住んでいるアーティストの作品が多く見られることになれば!

B:「墨東」という地域名を今回のイベントで初めて認識しました。

D:少ししか歩けなかったもので、厳しい評価になっているかもしれません。かなり殺風景ですが、人工的な感じが無いのは良いところ。これからが面白いのかな?と。



鳩の街通り商店街・鈴木荘の「靴郎堂本店」



「玉の井 Showroom」の展示スペース

2◆特に印象に残った場所、アートなど

鳩の街通りの裏路地★永井荷風が墨東奇談を書いた時の風景を味わえる裏路地と当時のモダンな建物の外観。

鳩の街通りの裏通り★遊郭だったらしき建物が堂々としていて迫力があつた。

鳩の街通り商店街★一見すると狭い幅の地味な商店街だが、遊郭の建物など街の記憶が残っており、民家を使ったセンスの良いカフェがあるなど、意外性のある街。

アート&カフェこぐま★昭和2年築の薬屋の雰囲気を残しながら改修されたカフェは、場の持つ魅力をうまく活用している。前を通ると絶対のぞきたくなる。

アート&カフェこぐま★外に水琴堀、薬局の棚の棚を利用した内部、かわいいこぐまのカップ、こぐまの形のかわいいドーナツ。美味しい料理。とてもすてきなカフェでした。

アート&カフェこぐま★あたたかい雰囲気の店内。ほっくりとして豆カレーが美味しかったです。

アート&カフェこぐま★前からいろいろな雑誌で目にしていた、行きたかったお店だったので、思いがけず行けてうれしかった。予想以上に手作りながらインテリアが作り込んであり、黒に近い木調の落ち着いた空間で雰囲気が良かったです（お店の方の雰囲気も）。

こすみ図書★商店街の茶舗を図書室にリノベーションするプロジェクト。美しく居心地の良さそうな空間に仕上がっていた。街角のたまり場になるといい。

東向島珈琲店 Pua-mama★モダンでお洒落な居心地のいいカフェ。活版印刷工房も兼ね、レトロクッキングの会場など、マルチ活動拠点になっている。

旧アトレウス家★まち見世のインフォメーションセンター。まずは、日本家屋にすごいネーミング。スタッフの人、アーティストの人が対応してくれる、まちの玄関+居間的な場。「まち見世」のイメージ、コンセプトが内包された場だと思いました。

旧アトレウス家★不思議な名前だし、駅から離れた路地の先にあり、たどり着くまでが大変。着いてみると普通の民家で、さらに不思議だった。

墨東まち見世さんぽ（長屋編）★文花～京島にかけての長屋を見て回るツアーに参加。ものすごく長屋、よく見ると長屋（だった）、長屋っぽく外装をつくってある一戸建てなど、長屋と一口に言っても、成り立ちや立地によってだいぶ違う様子であることがわかりました。

おしょくじ★飲食店の紹介をおみくじ風に紹介しているのが楽しい。

おしょくじ★あちらこちらに置いてある（登場する）のがいい。どこにあるか調べてもわからず、たまたま見つけて引いてみると何が出るか人によって違う。場所ごと人ごとの偶発性をうまく活かしているアート。

マンモス公園★京島にある公園。すべり台が2本、ビル2階ほどの高さに設置されている大胆な公園。あたりを見回すのにちょうどいい高さ。スカイツリーがよく見える。（もうこんなすべり台は設置されないだろうとのこと）

キラキラ橋商店街★夕方行くと、とても活気があつた。有名な商店街らしいが、不明にも私は初めてだった。活気だけでなく、生活を支える温かさみたいなものが感じられた。

墨東文庫★実際の町の人々の話（人生）から文庫目録を作るという発想がユニーク。想像力を刺激する味わい深いアート。

スパイスカフェ★古民家風の建物もすてきだし、カレーも美味しかった！ 絶対また行きたい場所。



鳩の街通り商店街の「カフェこぐま」



不思議な案内所「旧アトレウス家」

3 ■墨東まち見世のアートは、地区のまちづくりにどのように役立っている（いない）と思いますか。

- アートの設置個所と設置個所を迷いながら歩く、そこに町の面白い建物空間を発見する。そういった装置として機能しているように思いました。
- まちなかでのコミュニケーションの増加に寄与している。若者の勢いを取り込む入口になっている。まちの様子を変えて見せる派手なものではなく、普段のまちを魅せるアートが大半だった。まち見世でのアートは、人と人が関わるための媒体になっていたように思います。
- 気の向くままに歩いていると今回のプロジェクトのアートに出合うのだが、あまりにも範囲が広く、点在している。スカイツリーがらみの手作り文具を扱っていた鳩の街通り商店街の文具屋さんのような店はこれから注目を浴びるかもしれないし、鳩の街商店街の「地図てぬぐい」も味があった。アートがイベントではなく、日常に溶け込んでくると、まちづくりに役立つと思う。「おしょくじ」も、常設になれば面白い。
- おみくじのおしょくじは、上手に出来ていて、このイベントの後でも使える役立つ。
- アートとまちづくりとの関係は、1日歩いただけではよく分からなかったが、向島博覧会などの頃から続いているので、おそらくまちづくりの1つのツールになっているのだと思う。
- かつての向島博覧会の頃は、アートと町と人がもっと近かったような気がする。外から来たアーティストが長屋に下宿生活しながら創作活動をし、回りの住民もそれを応援しているような。今回は（最終日だけの印象ですが）、アーティストが落下傘部隊で、町の生活に根ざしていないように見えた。
- 正直よくわからないままに失礼してしまいました。



向島に残る職人長屋の風景



キラキラ橋商店街に置かれた「墨東文庫」

4 ■一般論として、まちづくりにアートはどのように役立つと思いますか。

（あるいは、どのように役立てればよいと思いますか）

- アートによるまちづくりは、特に古い建物等に新たな価値を見出す手法として、大いに役だっていると思います。が、谷根千のようにこアートが生活の中に浸透する（芸術家が住んだり、店舗を経営したりし始める→地域住民になる）と地域の魅力にもつながっていくものと思います。墨東まち見世は「ハレ」から「ケ」に移りかけたイベントと言えるのでは？
- アート自体は集客力もさほど多くなく、直接の経済的活性化にはつながりにくいだろう（むしろ不採算）。だが、アートには人々の持つ既成概念（固定観念）を打破し、伸びやかで自由な発想をもたらし、真実に基づく行動を勇気づけるというすばらしい機能がある。町の空間やそこでの生活場面に関係するアートは、きっと明日のまちづくりの糧となるであろう（代官山インスタレーションはこの機能を強く意識した企画であり、今回の墨東では、墨東文庫とこすみ図書にそれが感じられた）。
- 街の中でアートやイベントを行うことで、従来の街とは異なるコミュニケーションが生まれ、街に刺激を与える効果はある。それがまちづくりに役立つかどうかは、アートがその街の状況に適しているかによる。
- 地域に住んでいる、あるいは地域をよく知っているアーティストが「まちづくり」のコンセプトで参加すれば役立つと考えます。
- 芸術家と地域住民の信頼関係が第一だと思う。若手アーティストにとっては登竜門であり活躍の場であるが、アーティストの独創や思い込みだけでは、地域住民に受け入れられてもらえない。地域住民の声を集めた「墨東文庫」はなかなか面白かったし、「おしょくじ」もそうだが、店の軒先やレジの横に置けるようなちょっとしたアートというのは再訪する糸口になり、まちづくりに役立つと思う。
- イベント的でなく日常的なものになると良いと思います。ヨーロッパには町々に地元のアートセンターがあるそうですが、日本もそのようになると良いなあと思います。それには行政の力がある程度必要かと考えます。

●まちの多様度、自由度を高める要素になると思います（そのアートがまちに合っていればの話ですが）。そうすると創造性、想像力をもった人たちが集まってきたり、そこに住む人たちが刺激されたりして、まちでの生活そのものが面白くなる。結果的に、まちで生きることを楽しんだり、誇りに思ったりできるきっかけがそこから生まれるのではないのでしょうか。



現代美術製作所での「ネットワークパーティ」



古民家を転用した「スパイスカフェ」の一皿

5 ■その他、今回の企画に対する感想など（自由記入）

●「墨東まち見世」のプロジェクトは全貌が分かりにくかったのですが、良く分からないままに、成り行き任せで迷路的な街を彷徨するというのは、なかなか面白い体験でした。（K・T）

●取り壊そうと考えている建物を、新しい空間としてよみがえらせる若いアーティスト、建築家のデザイン（スパイスカフェ、こぐま）はとても新鮮で刺激的である。こうした作品を見て回るツアーを引き続き企画したいですね。（I・Y）

●言問団子と長命寺・桜もちを目当てに、車で浅草から吾妻橋だか言問橋で隅田川を渡り、墨堤通りに入り、せっかくだからと向島百花園を訪れたことがある。その時から、嗅覚が働いて（？）歩いてみたい、歩いてみたい、と思っていたのである。念願がかなったわけである。墨堤通り、明治通り、水戸街道、曳舟川通りといった大通りを車で走るだけでは何もわからない街。歩いて歩いて、迷い込んで、地図を見て、また歩くと、とっても楽しい町。薬屋さんを改装したカフェこぐまのあたたかい雰囲気がとても印象に残っている。（W・M）

●報告会での「ぼくとうとぼく」「墨東文庫」は腹が立ったほどつまらないものでした。学生の報告だったら作成過程が大事ですといってしまうとそれまでのことですが、アーティストというのであれば芸がなさすぎるものでした。もしこれに東京アートポイント計画として東京都民の税金が入っているとしたら、よけいに腹が立ちます。代官山インスタレーションや上野・谷中のアートリンク＋芸工展と比べるとかなり見劣りするものでした（比べるような規模ではないのかもしれませんが）。この日は最初のこぐまC A F Eと最後の押上のスパイスカフェがとても良かったことを思い出して、墨東まち見世企画の悪かった評価を覆い被そう。。（N・R）

●途中参加&退場ですみませんでした。（Y・H）

●先週は、NPO尾道の空き家再生プロジェクトと、瀬戸内の犬島でのアートプロジェクトを訪れました。どちらもアートをまちづくりの重要な要素として取り入れています。尾道の方は、人～アート～まち、という感じですが、犬島は、人～アート／まち、でした。その場所に必要（求められる）アートはどのようなものなのか、まちの視点が必要と思いました。（Y・E）

■コーディネーターより

かつての向島博覧会以来、久しぶりの墨東アート企画でした。今回は事前調査が行き届かず、行き当たりばったりの行動でしたし、最終日で多くのアートイベントが収束しつつあり、また発表会では町との関わりが少ない作品に偏りがちだったので（町に深く関わる作品は現地にある）、実態がどこまで体験できたのか心許ないですが、人間味あふれる町を歩き、心遣いの優しい古民家のお店に入ったりして、楽しんでいただけたようで良かったです。また次回も来て、もっと深く町を歩きたいですね！

（O・R）

茶舗を活かした「こすみ図書」の前にて

